

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 5年 3月 10日(金)

その1 通算313号

◇ 成長の表出 「正しく鍛えた身と心」

2月の朝会全校集会。自分が関わった3年間で、最も児童の成長が見えた朝会全校集会となった。

まずは、会に臨む「児童の心構え」。

背筋を伸ばして座し、動かずに会の開始を待つ整った児童の姿は、本校の「あたりまえ」の一つだ。

けれども、「ピシッ」という擬音が伝わってきそうな高みを感じられたこの日の姿勢は、これまでにない「勢い」があった。間違いなく一番だ。

さて、「無動・無音の雰囲気づくり」は、高学年、とりわけ最上級生である6年生の貢献こうけんが極めて大きい。

「背中で範はんを示す」と言うよりも、6年生の「範はん」は、【右半身で5年生に伝える】と評したい。10人全員が全力で行うから、空気が変わる。だから伝わる。

そして、5年生もレベルが高い。

6年生の範を感じて受け止め、6年に倣ならって【右半身で4年生に伝えて】いた。

範は伝播てんぱし、空気をつくる。つながる「無動・無音の範」は、【6年：卒業意識】、【5年：最上級生に向けた心の準備】と置き換えられよう。頼もしい限りだ。

あいさつで始まった2月の朝会。この日は、「いつもと違う流れ」があった。「表彰披露」である。

しかも、<感想画><絵画コンクール><才能開発コンクール><書き初め>と、これまでにない多さ。つまり、それだけ「多くの児童が表彰披露に関わること」を意味していた。



さて、「賞状」には、【句読点】が無い。これには、ちゃんとした理由がある。

もともと江戸時代までの日本では、手紙をはじめとする「書きもの」には句読点がない。ところが、時代が江戸から明治に移り、着物に変わる洋服のように欧米の文化や慣習が次々に取り入れられるようになった際、英文にある【、：カンマ】や【.：ピリオド】に代わるものとして「句読点」が導入された。

さらに「賞状」は、中国からの伝来物。起源となる中国では、古来より宮中行事きゅうちゅうぎょうじの下知げし（命令書）をはじめとする「書きもの」の文面においては、句読点を付けない。中学校や高校の国語で習う漢文にも、やはり「句読点」は無い。「レ点」や「一・二点」、「上・下点」などは、後年こうねんに日本人が漢文を読むために付した日本式の記号である。

ところが、漢文表記では、文脈わかが解りずらい部分が出てくる。そこで、「字間を一字空けたり、改行して対応したりする工夫」を取り入れた。よって、賞状の記載もこれに倣い、「句読点」の記載がない。明治・大正・昭和・平成・令和と時代が変わってもこれに倣っているのは、「賞状は、表彰する相手を敬って手渡すものであること。そして、従来付いていない句読点を改めて付すということは、相手を見下すことみくだすこと（句読点を付けないと読めない）になり、表彰する目的にそぐわない」という理由がある。

長々と紙面を割いて綴つづってしまっただが、本当に大事な部分は「ここ」である。よって、自分が賞状の代読だいてきの任にんにある際は、意識して対応せねばならない。

次に、「ここ」の部分の見方を「授与側」から「受賞側：受け手」に変えてみよう。すると見えてくる。「賞状」を受ける側こそ、【意識せねばならぬこと】がある。

受賞者は多くの者から「拍手」を受ける。

拍手は「おめでとう」「よく頑張ったね」「これからも頑張っ」等の意で、しかも、学校の表彰披露で拍手をしてくれるのは、一緒に生活している仲間たちだ。

けれども、壇上では、拍手に応えることは難しい。せめてできるのは、指先をしっかりと伸ばして正しい姿勢で立ち、立派に賞状を受け取ることぐらいなもの。

となると、どこで、何で「友の拍手に応える」のか。呼名よななの「返事」。これだ。

頑張ったから賞状がもらえるのは間違いない。ただし、頑張っても賞状がもらえない者は、本当にたくさんいる。そして、その多くの者から拍手をもらう。

受賞者には、受賞の前提として「大きな資格」があると考え。そして、呼名よななに対する立派な返事こそが、拍手に応える答えであり、賞を受ける資格なのだ。

多くの児童が表彰披露に関わった2月の朝会。

受賞者全員が立派な返事で応え、全員が「大正解の答え」を出した。

返事の声の大きさに、返事の声質に、しっかりと表出されたそれぞれの心意気。誰の目にも【正しく鍛えた心】がはっきりと見えた2月の朝会であった。